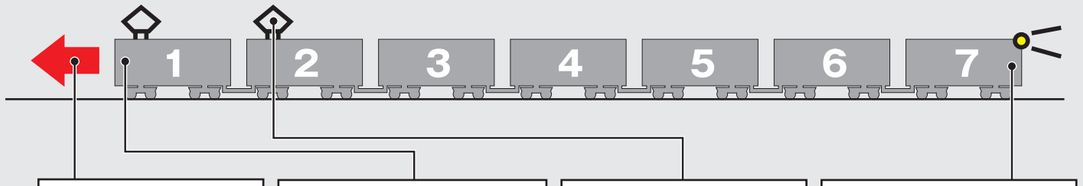
実際に電車はどのように走っていたのか?



時速60km以上のスピードが出ていた	「紙紐でコントローラー※のハンドルを固定した」と認定された	1両目だけでなく2両目のパンタグラフも上がっていた	手ブレーキ※が解除され、前照灯※が点灯していた
 ▲当時の三鷹電車区	 ▲紙紐と釘が発見された  ※コントローラーは自動車のアクセルにあたる		 ※手ブレーキは自動車のサイドブレーキにあたる ※前照灯は自動車のヘッドライトにあたる
竹内さんが供述させられた内容			
コントローラーのハンドルは2ノッチと3ノッチの間に固定。	(釘ではなく)針金をコントローラーの鍵穴に差し込み解錠した。(紙紐ではなく)麻紐で固定した。	2両目に行ったという供述も、2両目のパンタグラフを上げたという供述もない	最後尾の車両に行ったという供述も、前照灯を点灯したり手ブレーキを解除したという供述もない
検証			
それでは時速60kmのスピードは出ない	特殊な結び目(写真の丸印の部分)のある紙紐のことが、供述では一切触れられなかった	2両目のパンタグラフは、2両目に行き、上げ紐を引かないと上がらない	手ブレーキを解除せずに発車させると、車輪やレールにスリップの痕跡が残るが、そのような痕跡はなかった

竹内景助さんの発車方法では電車を暴走させられない

三鷹事件では「自白」以外に物証がない!

「自白」には任意性がない

竹内景助さんは取り調べでも法廷でも、「否認」「単独犯」「共同正犯」と供述を何度も変転させた。その背後に、検察による強引かつ巧妙な取り調べがあったばかりではなく、竹内さんが信頼を寄せるべきはずの弁護士から「共同正犯となると死刑が出ないとも限らない。竹内君、一人だと言ってくれると、竹内君も助かるし他の者も助かる」と単独犯行自白を維持するように奨励されていたことがある。

冤罪事件に共通した、日本の捜査当局が生み出した悲劇という他ない。

真犯人は複数犯である可能性が高い

三鷹事件の暴走電車を走らせるために必要で、かつ竹内景助さんの供述には触れていない操作に次のものがある。

①2両目の車両のパンタグラフを上げるために、2両目に行き上げ紐を引く。

②最後尾の車両で手ブレーキを解除し、前照灯を点灯させる。

これらの事実は、竹内さんが真犯人ではないことを証明しているが、それにとどまらず、短時間でこれらの操作を行ったことを考えると複数犯の可能性が高いのである。

当時の新聞等でも複数犯の可能性を繰り返し報じていた。



左:毎日新聞(1949年7月22日)、右:朝日新聞(1949年7月20日)

大がかりで計画的な犯行

■事件が予告されていた

暴走電車が粉砕した三鷹駅前の交番に、重大事故が起こるとの予告が事故直前にあったと警官が法廷で証言している。実際、その連絡を受け、警官らは書類を持って逃げた。

また、事件の予告は警察だけでなく国鉄八王子管理部にも伝わっていたことが法廷証言で明らかになっている。

竹内さんは、その夜になって突然思い立って犯行に及んだと供述させられているが、「予告」の存在は竹内さんが犯人でないことを明示している。警察も国鉄当局も真犯人の「計画」を事前につかんでいたと推察される。

■政府・マスコミの異常に早い対応

事件翌日の7月16日夕刻、吉田茂首相が「総理大臣声明」を発表。17日の朝日新聞に転載された声明文は、三鷹駅の電車転覆に直接言及していないものの、「主として共産主義者の扇動によるものである」と、事件が労組や共産党の暴力行為によって引き起こされたかのような決めつけがされていた。

また、同じ16日夜までに、読売新聞社に一枚の写真が持ち込まれた。電車のハンドルを紐で固定した写真で、17日の朝刊に「無人電車のトリック」と題するスクープとして掲載された。「犯行手口」を再現したものだが、その手口は、1ヵ月以上を経て竹内さんが「自白」させられたものと同じだ。

事件から一日も経っていないうちに、政府、新聞社が、組合と共産党の組織的犯行の線で足並みをそろえ、手口まで断定していることは、事件が「謀略」であったことをうかがわせる。



吉田茂声明　事件翌日に発せられた声明を伝える朝日新聞(1949年7月17日)



読売のトリック写真　現場検証も終わっていない時期に作られた読売新聞記事(1949年7月17日)

事件の背後に見え隠れするアメリカ占領軍の影

事件後ただちにMP(米陸軍憲兵)が事故現場を封鎖し、日本の警察の現場検証は後回しになった。MPが現場検証後に証拠を持ち去ったという証言もある。



事故の現場　ヘルメットにMPの文字が見える